Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-15

「重複」の文法的研究

程, 莉

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2016-03-25
(Date of Publication)
2018-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第6556号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006556

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式３）

論　文　要　旨

氏　名　　程　莉

専　攻　　グローバル文化専攻

指導教員氏名　　定延　利之　教授

論文題目（外国語の場合は必ず日本語訳を併記すること）

「重複」の文法的研究

論文要旨

本研究は，主に現代日本語共通語と現代中国語共通語における重複表現の観察を通じて，両言語の重複表現の自然さを律する文法を包括するメタ文法を構築し，言語研究における専門用語「重複」の定義を検討するための基礎的な観察を行うものである。

重複が言語表現を不自然にすることは，グライスの「量の公理」を持ち出すまでもなく明らかなことのように思われるが，実際にはそうではなく，言語研究においてはさまざまな自然な重複表現の存在が知られている。しかし，「では，どのような重複が自然で，どのような重複が不自然なのか，そしてそれはなぜなのか？」という問題の追究にはほとんど手が付けられていない。結果として現状では，重複はもっぱら語用論的な原理のみから，その不自然さが論じられるに留まっている。

本研究では，そのような問題が，語用論とは別に，文法的な観点からも追究可能であり，さらに，個別言語を超えた，より一般的な通言語的研究の見地から，重複の自然さ～不自然さを論じることが可能であるということを，日本語と中国語の観察をもとに示したい。また，この作業の中で，「重複」という概念自体も，言語の観察記述に最も有効な専門用語へと精錬することに向かっていくことも本研究の目的とする。

博士論文は，「序論」「本論」「結論」の３つの部分から成り立っている。

最初の「序論」には２つの章が含まれ，第１章において，本研究の問題意識や目的，考察対象，研究方法，および博士論文の構成を述べる。第２章では，本研究の立場と，重複と冗長性の関係，および重複と関連する先行研究が取り上げ，本論の前提が形成する。

論文の中心である「本論」には５つの章が含まれ，そのうちの第３章～第６章では，重複が現れる構造ごとに詳しく観察し，言語差についての記述も展開する。これらの４つの章は，それぞれ一つのタイプの重複と対応している。第３章の「項－述語」構造における重複（例：「ノーベル賞を受賞する」）では，日本語と中国語の合成的表現 VN（V は動詞的要素，N は名詞的要素）を例にとり，重複の一方が VN である場合の表現の自然さについて，「語の不透明性」，「主要部前置・後置の問題」，「修飾要素による意識の拡散」，「VN の性質」「表現の他動性」など文法的な観点から一定の理解が得られることを示した。第４章の「主題－題述」構造における重複（例：「彼のいいところはやさしいところです」）では，日本語の主題文を取り上げ，主題文に生じる重複の自然さについて，重複している要素が「合成語か単純語か」「複合語か派生語か」「和語か漢語か」「項目語か否か」という問題と関わっており，また，「修飾要素の重複か，被修飾要素の重複か」という文法的環境の違いによって傾向が異なること，さらに「話し手の意識の推移」とも連動するということを示した。また，第５章の「修飾－被修飾」構造と「同格」構造における重複（例：「5 人の学生たち」）では，「数の一致」に関する日中の言語差を紹介した上で，日本語の「これら（の）」と中国語の“这些”という指示詞と関連づけて，「数の一致」タイプの重複の自然さを検討した。結果としては，「数の一致」の自然さは「アニマシーの高低」と「言語構造」の問題と関わるだけではなく，語彙の問題（本稿では，日本語の「これら（の）」と中国語の“这些”の違い）とも関連しているということを示した。さらに，第６章の「並列」構造における重複（例：「私は小説を読むが，彼は雑誌を読む」）では，日中英の対照から重複とその解消（「省略」）を合わせて考察した。その言語差について，「語順の問題」と「接続詞の有無」から一定の理解が得られることを示した。第３章～第６章では，書きことばと話しことばを区別せずに，統一的に記述してきたが，第７章では，書きことばとの対照から，とくに話しことばにおける重複の特徴を検討した。話しことばでの重複と書きことばでの重複の違いについて，「話し手の態度」に関する部分は，質的な違いがなく，程度の問題であると考えられるが，その質的な違いとしては，複数の節または文節に亘って，重複が現れるのは話しことばだけであるということが挙げられる。

最後の「結論」には，２つの章が含まれ，第８章では，各章のまとめを論じた上で，「本論」の考察を基にして，日本語と中国語の両言語の重複表現の自然さを律する文法を包括するメタ文法を構築した。また，第９章では，今後はどのような視点から専門用語「重複」の定義を追究するのか，そのためにどのようなことをさらに検討するべきなのかという今後の発展の可能性を論じた上で，本研究において見込まれる学術的成果を述べた。

【課程博士用】

論文審査の結果の要旨

氏　　名	程　　莉		
論 文 題 目	「重複」の文法的研究		
判　　定	合　格 ・ 不 合 格		
論文チェックソフトによる確　認	☑ 確認 ☐ 未確認　理由：		
審査委員	区　分	職　名	氏　名
	委員長	教　授	朱　春　躍
	委　員	滋賀大学大学院言語教育研究科 教　授	井　上　優
	委　員	教　授	定　延　利　之
	委　員		印
	委　員		印

要　　旨

学位申請者・程莉氏の論文「「重複」の文法的研究」は，言語表現の重複という現象がこれまで考えられていた以上に文法的要因によって自然さを変えるということを，現代日本語共通語と現代中国語共通語を中心的題材に論じたものである。

重複という現象は，これまで正当な光をほとんど当てられてこなかった。巷間では重複はひとえに「馬から落ちて落馬した」のような避けられるべき誤用の一種とされ，この扱いは規範主義的な言語研究においても何ら変わるところがない。事実を重視する記述主義的な言語研究では，一部の重複は「一致」あるいは「呼応」という名で文法的現象として認められていたものの，その他の重複は言語哲学者グライスの「量の公理」という語用論的な原理によって一律に不自然とみなされるのが通例であった。しかし，これは事実とは合致しない。実際には，一致や呼応以外の重複の中にも完全に自然なものがある。つまり「どういう重複が自然で，どういう重複が不自然か」という問題は，これまで考えられていた以上に文法的観点からの追求が可能である。本論文は，以上の事実を指摘して日本語と中国語の重複に関する文法記述をおこない，重複のメタ文法を構築する基礎を築こうとしたものである。

本論文は，全３部，全９章から成る構成をとっている。第１部は序論で，そのうち第１章では本論文の背景や目的，具体的な考察対象，用いる手法などが述べられており，第２章では前提として重複に関する基礎的考察がまとめられると共に，重複に関して実質的貢献を果たした僅かな先行研究の概要がまとめられている。また第３部は結論部で，そのうち第８章ではそれまでに得られた知見が短くまとめられ，第９章では今後の課題が示されている。本論にあたる第２部（第３章～第７章）では，重複が文法的観点から５類に大別され，文法的な観点から綿密な記述が展開されている。

第３章ではたとえば日本語の重複表現「ノーベル賞を受賞する」が自然である一方，それに対応する中国語の重複表現“获奖诺贝尔奖”が不自然であるといった，項表現と述語表現における重複が取り上げられており，これらの重複表現の自然さには，意識の拡散といった認知的な要因だけでなく「語の不透明性」「語順」「語彙化の程度」「他動性の高低」といった文法的な要因が関与することが論じられている。第４章では「彼のいいところはやさしいところです」のような，主題表現と題述表現における重複が取り上げられ，「修飾表現の有無」「重複要素が修飾表現か被修飾表現か」「措定か指定か」「知識か体験か」「述語の名詞性」「終助詞や副詞のサポートの有無」といった統語論的～語彙論的な要因，そして「新しい視野の導入」「探求すべき「謎」らしさ」「題述部のまとまり」といった意味論的な要因によって重複の自然さが変わることが論じられている。第５章では「５人の学生たち」のような修飾＋被修飾表現，そして「学生たち５人」のような同格表現における重複が取り上げられ，「アニマシー」の他，形容詞と名詞のような品詞の違いが重複の自然さに関わる局面があることが論じられている。第６章では重複のない日本語「私はコーヒーを，彼は紅茶を注文した」に対応する中国語“我咖啡，他点了红茶”や“我喝了茶，他咖啡”が不自然といった，並列表現における重複が取り上げられ，語順という文法的な違いから両語の重複の自然さが論じられている。以上の第３章～第６章が話しことばにも書きことばにも見られる重複を扱っているのに対し，第２部末尾の第７章では「なんか大体６時前後っぽい感じ」のような，日常会話を典型とする話しことばにおける重複が取り扱われている。そこでは，「強調」「ぼやかし」「敬意」「接続」といった態度的意味が発話に持続的に影響し，結果的に重複を生むことが論じられている。

本論文は，重複の受容に消極的であった伝統的な言語観に根本的な反省を加える，高い革新性を備えており，言語形式の記述と考察に関して重要な知見をもたらす価値ある論考の集積であると考えられる。よって本審査委員会は全員一致で，学位申請者の程莉氏は，博士（学術）の学位を得る資格があると認める。なお，申請者は申請に先立ち，博士後期課程在学中に以下２編の査読付き学術論文を発表している。

程　莉 2014 「孤立的反復の文法的理解―日本語と中国語の VN 型合成的表現を例に―」『日中言語研究と日本語教育』第７号，pp. 11-21.

程　莉 2015 「「～N を VtN する」型重複の文法的理解」『日本認知科学会第 32 回大会論文集』pp. 370-378.

以上